

井上芳雄

ミュージカルの舞台は
発見する毎日の積み重ね



在学中のミュージカル・デビュー

小学四年生のとき、劇団四季のミュージカル『キャッツ』が地元の高岡にやってきたので、家族四人で観にいきました。ミュージカルは初体験でしたが、すごく感動して、そのときからミュージカル俳優になりたいと思うようになりました。両親がクリスマスチャンでしたので、小さいころから教会の聖歌隊に入っていて、もともと歌を歌うのが好きだったので、『キャッツ』を観て、歌で物語を表現するミュージカルの、訴えかける力の強さに衝撃を受けました。

『キャッツ』に出演されていたキャストの方々のプロフィールを見て、出身校に「東京藝術大学音楽学部声楽科卒」と書かれているのが目につきました。それで、東京藝大に進めばミュージカル俳優になれるんだと(笑)そう思って、中学生になると歌の個人指導を受け始め、ダンスも習うようになりました。

藝大に進んでからは、声楽の基礎をしっかり身につけるため勉強に励むとともに、学生らしい生活も楽しく送っていました。そんな大学二年生のとき、「舞台芸術論」という、バレエ、オペラ、ミュージカル、歌舞伎といった舞台芸術の第一人者が講義をする科目に、「エリザベット」の演出家である小池修二郎さんがいらっしたのです。たまたまお話しすることができたので、「僕はミュージカルをやりたいと思っているんです」と言ったら、小池さんは「〇月〇日に帝劇の九階に来なさい」とおっしゃいました。じつはこのとき、小池さんはちょうど東宝の『エリザベット』の初演の準備をしていて、ルドルフ役の人だけが決まっておらず、探していたらしいんです。

プロのオーディションなんてなかなか受けられないし、今の自分がどれくらいのレベルなのか知っておきたい、それくらいの気分でした。小学生のときからの夢だったので興奮していましたし、周りも顔を知っている俳優さんばかりで、そのときの僕はミュージカル・ファンの一学生という感じだったかもしれません。ただ『エリザベット』は、もともと宝塚の公演も好きだったので、自分なりに感情を込めて歌うことができたと思います。そうして、「じゃあ君、ルドルフという役をお願いしたいんだけど」ということになったんです。だから、そのときは「シンデレラボーイ」だと言われましたね。



下：『ダディ・ロング・レッグズ～あしながおじさんより～』

写真提供／東宝演劇部

左：『ルドルフ ザ・ラスト・キス』 写真提供／東宝演劇部



約束していた卒業を果たす

最初の公演は三か月連続で、さらに翌年も地方を含めて約四か月の再演が決まっています。それでは大学に続けて通うことができないため、約一年間休学したんです。その後、入学して六年目の年に復学し、足りなかった単位をとって卒業しました。というのも、初舞台を踏むときに、両親と事務所と東宝の皆さんとで、卒業することを条件にしていたんですよ。先輩のなかにも中退した人は少なくないですが、僕の場合、けじめとしてどうしても卒業したかったんです。入試がどれだけ大変だったか、それに入りたくても入れなかった友人たちも見ているから、最後まででは終えなければという気持ちが強くなりました。

『エリザベト』に受かったときも、テノール専攻の鈴木寛一先生に三か月間大学を休む許可を得たんです。もしそのとき認めてもらえなかったら、僕は大学をやめざるを得なかったと思うのですが、鈴木先生は「もともとミュージカルが好きだったんだから、そちらの道をやりなさい」と言っただけで、休むことを許してくださいました。

声楽科の学生は一学年六〇人ぐらいで、当然クラシックのオペラや歌曲の歌手になりたいという人がほとんどですから、僕は正直浮いていました。オーディションに受かったときもみんな戸惑い、驚いたことでしょう。福岡では県のコンクールで一位をとっていたものの、藝大に来てみるとそんなに歌えるほうでもないし、「あの英雄が」みたいな反応だったと思います。

でもその後、藝大を出てミュージカルの道に進む人は増えましたね。それまでは興味がなかったけれど、仕事として「食べていけるみたいだ」という理由もあるかもしれません。でも僕の後には続く人が出てきたのは、嬉しいことです。

感じたことをどう表現するかの積み重ね

藝大はほかの大学に比べると少数精鋭で規模が小さく、外に出ていかないかぎり顔ぶれが変わらないという面があります。たまたま僕は学外で活動する機会を得たのでラッキーだったのですが、藝大生はもつとこで得たものを自分でプロデュースし、表現し、売り込んだり、人脈をつかんだりできるだろうと思います。



舞台に話を戻すと、何か月ものあいだ新鮮に演じるには、毎日なかにを発見する必要があります。自分がその役を演じる意味や、共演者が昨日とは違う演技をしたとき、どう感じるかつねに問い直す。生きること自体が本来はそういうものだと思います。

歌でも、踊りでも、お芝居でも、感じたことをどう表現するかの積み重ねで、ミュージカルはそれが一体になったものです。たとえ決められた台詞でも、それを口にしたとき自分の心が動き、人の心を動かすことができるのはすごいことだと思うんです。大変なこともたくさんあるけれど、そういう意味では毎日がとてもおもしろい。結局そういうことを感じたくて舞台を続けている気がします。

いのうえ・よしお

ミュージカル俳優。1979年、福岡県出身。2004年、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。2006年、第13回読売演劇大賞、杉村春子賞受賞。2008年、第33回菊田一夫演劇賞受賞。2011年、第20回日本映画批評家大賞、舞台ミュージカル大賞(西條笑児賞)受賞。2000年に、ミュージカル『エリザベト』のルドルフ役で鮮烈なデビューを飾る。以降、その高い歌唱力と存在感で数々のミュージカルや舞台に出演。役者以外にもソロコンサートやディナーショー、CD制作などの歌手活動も積極的におこなっている。